

縄文土器をもとにした音楽づくりの試み (第7報)

— 國學院大學栃木短期大学子ども教育フィールドの取り組み —

はや かわ ふ み こ
早 川 富美子

(本 学 教 授)

なか むら こう さく
中 村 耕 作

(国立歴史民俗博物館准教授)

1. はじめに

筆者らは、2016（平成 28）年度より〈縄文×音楽〉のプロジェクトとして、当時國學院大學栃木短期大学日本文化学科日本史フィールドの考古学担当であった中村（2021（令和 3）年度まで）と人間教育学科子ども教育フィールドの教員養成課程において音楽教育を担当する早川が中心となり、新たな体験学習プログラムの開発を進めてきた。その内容は、〈その地域の縄文土器の観察をもとに他の参加者と協働して創造的な音楽づくりを行う〉というものである。これは、新たな価値創造のための創造的作品づくりとして文化財を活用する方向を模索する活動であり、特に音楽という形の残らない作品に注目したものである。

このプロジェクトは、2016（平成 28）年 8 月の小・中学生向け企画「縄文遺跡を発掘しよう！」に、早川が所属する子ども教育フィールドの学生がサポート役に関わったことにはじまる。以後、新たな体験学習プログラムの実践を繰り返してきた。このうち 2020（令和 2）年度から 4 年間は科研費（挑戦的研究（萌芽））「縄文土器文様を奏でる：考古学と音楽教育の協同による新感覚体験学習プログラムの創出」による研究として実施している。

これまでに、栃木県内での小学校、中学校、高校生、兵庫県や新潟県の小学校、埼玉県の中学校や郷土資料館など、学校、博物館、遺跡、公民館での実践に広げることができた。これらの実践は、地域や所属も異なり、年代も幼児から 70 代の大人までと世代を超えて大きく展開することになり、その成果を考古学や音楽教育の研究会、学会等で発表してきた。そこで各専門分野の研究者、教育現場の教員、博物館関係者などから貴重な助言と協力をいただきながら研究を推進してきた。（表 1）

このプロジェクトにおいては、学校や博物館に加えて、考古学や音楽教育の専門家が関

わることの重要性と共に、次世代を担う学生が参画することを特徴の1つとし、学会発表等でもその意義を示してきたが、詳しく検討するものではなかった。本稿では、学生の関りという観点から、研究のきっかけとなり、その活動を支え、さらに考古学分野と音楽教育の連携を実践的に学ぶことを意図して関連する取り組みを行ってきた子ども教育フィールドの学生（保育士、幼稚園・小学校教員養成課程）の活動を振り返りながら、活動の意義と学びを確認し、今後の研究の展開の可能性を考えていきたい。

1. 〈縄文土器×音楽〉プロジェクトについて

本プロジェクトの最大の特徴は、以下の3点である。

- (1) 地域の実物の土器を使う（地域博物館や埋蔵文化財センター等と連携）
- (2) 縄文時代に存在した自然素材を使う
- (3) 協働的な学び（参加者同士のコミュニケーション）を重視し、新たな価値を創造する

まず、縄文土器は可能な限り、その地域の博物館の協力を得て地元の遺跡で発掘された実物を使用している。次に音楽プログラムとしては、土器の形・色・模様などを手掛かりとして、縄文時代に有り得た自然素材（クルミ、クリ、ドングリ、トチノミなどの木の実とその木や葉、貝、シカ角、イノシシ骨、ヒョウタン、石（サヌカイト）等）（図1）を用いて音で表現し、音楽づくりを行うことである。参加者同士がコミュニケーションをとりながらアイデアを出し合い、グループでの音楽づくりを通して新たな価値を創造していくものである。

2024（令和6）年度までの〈考古学×音楽〉の実践は、表1の通りである。また、早川が担当する音楽関係の授業（専門音楽、教科教育法音楽、歌と楽器等）において、中村をゲスト講師として連携授業を実施し、本プログラムを実際に体験してきた。そして、実践に応じて子ども教育フィールドの学生有志が、その学びを活かして、サポート役として関わってきた。

実践を重ねるうちに、考古学の部分におけるプログラム内容は、以下に示す①～④の、流れが定着していたが、⑤～⑥の音楽づくりの活動においては、1期、2期、3期と試行錯誤をしながら大きく3つの方法で実践を行ってきた。実践全体の流れは実践場所によっても異なるが、以下に示すような流れとなっている（中村・早川 2023a）。

ワークショップの流れ

- ①導入：大型等尺年表、縄文風衣装などで縄文への関心を高める。実践場所が遺跡の場合は遺跡見学と合わせて屋外で行う。
- ②縄文を学ぶ：土器の機能、縄文時代の生活・食べ物、地域の遺跡などを紹介（博物館の場合は展示室で実施）。

- ③土器の観察：地元の土器の現物を借用。現代鍋と比較、器形・文様構成などの特徴を観察。
- ④土器の文様を施文：粘土に縄文原体、貝、ヨシなどで文様をつける。
- ⑤音探し：土器の特徴的部位に合わせ、縄文時代に存在した自然素材の中から音素材を選ぶ。
- ⑥音楽づくり：土器を根拠（土器の形・文様、文様構成、土器から連想する縄文の暮らしなど）を発想の手掛かりとして音楽をつくる。
- ⑦発表：作品のコンセプトを紹介し、演奏。他班の解釈や演奏方法、講師の講評を共有。
- ⑧振り返り：参加者アンケートまたはその場で感想等を共有。
- ⑨記念写真：講座終了後に、土器をもって記念撮影をする。



図1-1 自然素材集合



図1-2 木の実・豆類



図1-3 ヨシ・貝



図1-4 イノシシ骨・シカ角



図1-5 石（サヌカイト）



図1-6 ドンダのなる木

図1 〈縄文×音楽〉で使用する音素材

2. 中根八幡遺跡における実践

2.1 2016（平成 28）年度の実践（1 期：土器破片をもとにした実践）

2016（平成 28）年 8 月、中村が指導する日本文化学科と早川が指導する人間教育学科との学科を超えたコラボレーションにより、人間教育学科の学生有志 10 名（保育士、幼稚園、小学校教諭の教員養成課程）が 2 日間の発掘体験の機会を得た。1 日目は社会科教育用に遺跡の調査体験をして、2 日目に栃木県主催事業である「とちぎ子どもの未来創造大学」の“縄文遺跡を発掘しよう！”に参加登録をした小学生の発掘体験のサポートをする事前学習を行うことになった。

この実践を行うにあたり、考古学の中村からパブリックアーケオロジーの一環として、発掘体験後に何か新しいことができないかと提案され、発掘した土器の破片をもとに、学生が小学生をサポートしながら「音楽づくり」を早川が提案し実践することになった。これが〈縄文×音楽〉プロジェクトの発端となった。まず、この実践について簡単に振り返ってみることにしたい。

実践当日、子ども教育フィールドの学生たちは、参加した小学生の体験発掘、発掘した土器破片の洗浄、土器破片の拓本のサポートを行った。その後、土器破片をもとにした音楽づくりのワークショップを遺跡に隣接する公民館で約 30 分行った。はじめに中村が土器の説明をした後に、早川が音楽づくりの全体を進行し、学生たちが小学生のサポート役となり音楽づくりの活動を行った。破片をもとにした音楽づくりの活動は、学生にとっても、小学生にとっても初めての体験である。形や文様、大きさ、色などが異なる土器破片を手にとり、観察しながら即興的に表現する活動を試みることにしたのである。土器破片は叩いて音を出すことができないため、まず音素材を何にするかを思案した。実践の場が発掘現場に隣接する公民館という場所である。そのため、音楽室にあるような楽器ではなく、100 円ショップで購入できる小さくて身近な生活用品（箸、小ほうき、すりこぎ、すり鉢、竹ざる、植木鉢など）、縄、石、竹、早川が作った竹ぼら、土笛、そして縄文時代から有り得た豆類（アズキ、エゴマ）、木の実（クリ）、貝などを準備した。〈縄文×音楽〉の 1 回目の音素材の選択は、ここからスタートした。音楽づくりの活動では、参加した小学生全員と学生が輪になり、各自が前述した音素材の中から選択し、1 回目は自由に、2 回目は別の音の出し方を工夫して音を出してみるように伝えた。児童が表現した音を順番に重ねたりして多様な音の重なりを楽しんだ。その後、土器破片 1 点を拡大して描いた絵を見ながら、声や体を使って表現してみるなど表現方法を広げていった。そして異なる小学校出身の児童は 5 名ずつ 4 つのグループに分かれ、学生が 2～3 名ずつサポートについた。学生たち



図2-1 小学生発掘



図2-2 グループごとの音楽づくり



図2-3 グループごとの音楽づくり



図2-4 グループごとの音楽づくり

図2 2016 中根八幡遺跡での子ども発掘・音楽づくり

のサポート内容は、準備した模造紙の上に、小学生が1人土器破片3点までを並べ、並べた土器片のところで音が出せるようにするサポートである。小学生は各グループ1枚の模造紙に長い線を引き、その線状に土器破片を自由に並べた。それを図形楽譜のように捉え、学生や小学生が木の枝を使って指揮者のように指示したりしながら、自分が並べた土器破片の特徴を選択した音素材で自由に音を出した（図2）。

最後にグループ発表をし、発表後にグループの工夫点等をコメントした。〈縄文×音楽〉における第1回目の実践は、和やかな雰囲気の中かで終了することができた。はじめは戸惑っていた児童も、「これは模様がある」「ここはギザギザしている」など、発掘した土器の破片の形や文様の特徴を捉えながら、各自が選んだ音素材で様々な音の出し方を工夫するなど、児童の想像力の豊かさにサポート役の学生たちも驚いていた。

この実践では、土器片の刻みや沈線のリズムを感じ取ってもらい、音に変換することはできたが、音から音楽としてまとめていくという点に関しては課題が残った。サポートする学生たちの力を向上させていくことが必要であったが、発掘と音楽のコラボレーションによる「音楽づくり」の活動は、とても楽しく可能性があると思われた。

2.2 2017 (平成 29) 年度の実践

2017 年(平成 29)年度の「とちぎ子どもの未来創造大学」の講座「縄文遺跡を発掘しよう！」に参加した栃木県内小学生 3 年～6 年生 19 名に、短大学生 10 名が加わった。この実践に関する詳細は早川・中村(2019a)を参照されたい。この遺跡での実践は 2 回目ということもあり、特に音楽活動においては、「縄文時代の自然素材などを用いて、当時のことを想像しながら音を出す工夫をする」ことを目標として取り組んだ。

本節では、2.1 で述べた中根八幡遺跡での実践と異なる 3 つの点について述べたい。

まず 1 つ目は、音楽づくりで使った音素材を少し変更し、現在〈縄文×音楽〉で使用している音素材とほぼ同じようにしたことである。2.1 では、音素材を木の実や貝などの自然素材に、箸、小ほうき、すりこぎ、すり鉢、竹ざる、植木鉢、縄、石、竹、竹ぼうなどを使っていたが、この実践では、前述した石以外の音素材を活用せず、自然物をさらに追加して、アズキ、エゴマ、クルミ、クリ、ドングリ、貝、ヒョウタン、石、木の枝などに、手作りの土笛、土鈴、土器太鼓(有孔鏝付土器の復元模造品)なども追加した。土笛、土器太鼓は考古学的には賛否諸説あるが、音楽表現の幅を広げることができるのではないかと考え、準備した。

2 つ目は、様々な音素材に興味関心をもってもらえるように、音楽づくりの活動場所に事前に準備しておいた。そして、参加者が受付後や各活動の待ち時間などに自由に触れて音を出して楽しめるように環境設定をした。学生たちは、貝などの音素材で初対面の参加児童とコール&レスポンスで音遊びをしたりするなど、音素材に親しみをもってもらえるよう工夫した。

3 つ目は、児童の発掘体験、土器片の洗浄、拓本の活動に関しては、前年度同様であったが、この実践では音楽づくりの方法を近藤真子氏の「クロック・オーケストラ」のアイデアを活用して、1 分間の音楽づくりを行ったことが異なる点である。サポートする学生自身もクロック・オーケストラでの音楽づくりの活動は初めてである。

参加児童と学生は 4 つのグループに分かれ、班で選択した 1 片の土器破片の特徴を共有し、それをもとに音素材を選択した。各グループに小さな紙製時計盤を準備し、学生が秒針を動かした。児童は選択した音素材で時計盤のどこで音を出すかを決め、10 秒ずつ即興的に音を出した。その後、黒板に大きな時計図を掲示し、早川が秒針に見立てた木の枝で 1 時から 12 時までを示した。4 つのグループは 10 秒ずつ音を出し、残り 20 秒は 4 つのグループが一緒に音を出して 1 分間の音楽づくりを行った(図 3)。



図3-1 発掘前の音遊び



図3-2 子ども発掘体験



図3-3 班でクロックオーケストラで音楽づくり



図3-4 全体でクロックオーケストラで音楽づくり

図3 2017 中根八幡遺跡での音楽づくり

実践を終えて、学生たちに活動の振り返りを自由記述で記入してもらった。特に音楽づくりの活動については、児童が土器片の多様な文様の特徴を捉え、音素材を選択し、吹く、叩く、振る、擦るなどの奏法の工夫や強弱の変化をさせながら表現している様子を記述している。そして、「発掘と音楽が結びつく体験はとても貴重であったが、難しかった」とも記述している。初対面の児童とコミュニケーションをとりながら、縄文文化をもとに音楽づくりを行うという実践は、教職を目指す学生にとっては見方や考え方が多角的になり、意義があったのではないかと考察する。

3. 栃木市立小野寺南小学校における実践

中根八幡遺跡での2回の実践後、栃木市立小野寺南小学校での「表現活動交流会」において実践することになった。この実践は学生が小学校に出向き、学生がリーダー役となって主に音楽活動を行っているものである。この小学校との連携活動は2006（平成18）年度から継続し、2020（令和2）年に小野寺北小学校と統合し、小野寺小学校となった現在でも実施している。〈縄文×音楽〉の実践は、統合前の2018（平成30）年度に実践を行った。

3.1 実践で使用する教材の製作

《縄文×音楽》のプログラムは様々な教材を使用するが、この製作を学生有志が担ってきた。2018（平成 18）年 9 月の小野寺南小学校全校児童を対象とした実践に向けて準備をしたものが基盤となっている。その後も追加製作をしたり、現在は使用していない教材もあるが、ここでは準備してきた教材を示しておく（図 4）。学生たちは使用する教材の製作（教材づくり）を通じて、歴史、美術、被服などの横断的な学びを得ているといえよう。この教材製作に関わった学生たちの献身的な協力に感謝したい。

① 等尺大型年表

体育館で広げても縄文時代の古さと長さが実感できるように、50 年を 10cm とする全長 15 m の長さで製作した。製作した当初は平成であったが、現在は令和も追加している。実践では、最初は巻いておき令和から縄文へと徐々に広げていく。江戸時代で 80cm、縄文時代になると 10 m の長さになり、改めて縄文時代の長さが視覚を通して実感できるようにした。時代名の下方には、小学生にも興味をもってもらえるようなイラストを手描きしている。例えば、奈良時代は奈良の大仏というようなイラスト画である。縄文時代のイラスト画は土器や土偶などを描いているが、その後も、実践場所に応じて、その都度学生に土器などを描いてもらい追加している。この年表は、この《縄文×音楽》プロジェクトでは一番大きな教材であるが、遺跡など野外での活動にも役立っている。

② 縄文風衣装

縄文風衣装は、縄文時代にも使用されている麻素材を利用して製作した。コーヒー豆が入っていた麻袋が安価で入手できたので、その麻袋を断ち切り、文様を針で刺繍して製作した。まずは 2018 年 9 月の実践に向けて 6 年生の児童分を製作することにした。その後、着用すると肌がチクチクするというので、2019 年の実践に向けて裏地を縫い付けて解消した。

小野寺南小学校での実践後、この縄文風衣装は、春日部市郷土資料館など多くの実践で活用することになった。当初は、実践のはじめに衣装を着用して雰囲気味わったり、音楽づくり後に、土器を持って記念撮影をしたりするなどに活用していた。しかし、春日部市郷土資料館館長の實松幸男氏から、音楽づくりの時にも着用すると雰囲気も味わえるのではないかとご助言をいただき、補講期間等に学生有志が製作に協力し、各実践で参加者全員が着用できるよう枚数を増やした。

③ 土器の展開写真

2019 年 2 月の小野寺南小学校における実践は、本物の土器と土器の展開写真を使った音楽づくりを行った。8 つの班で異なる土器を使うため、中村が撮影した土器写真を何枚も



図4-1 等尺大型年表



図4-2 縄文風衣装の製作



図4-3 縄文風衣装に裏地を取り付け



図4-4 土器展開写真を作成

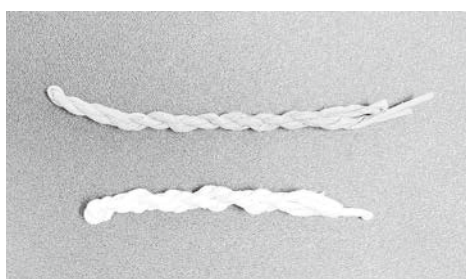


図4-5 縄文原体の製作

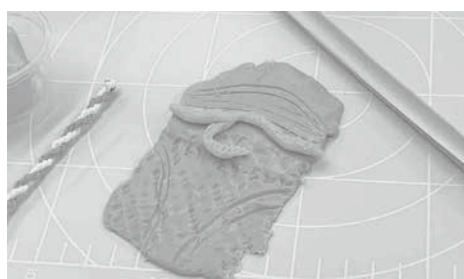


図4-6 粘土に施文



図4-7 縄文マスクの製作



図4-8 縄文マスクを着用

図4 実践に向けて準備した教材など

重ねながら貼り付け、8つの展開写真を製作した。さらに、体育館でも全校児童が見られるように拡大してパネルに貼り付けて準備した。

以後の実践では、土器の展開写真は3Dデータを拡大印刷して作成することとなり、この展開写真の準備は行っていない。

④ 施文体験用の縄文原体

粘土に文様の施文体験をするために、中村の指導を受けながら、縄文原体の製作を行った。小野寺南小学校での実践では太い縄を編んでいたが、その後、細めの紙ひもを利用して製作している。実践によっては、日本史フィールドの学生や中村自身が製作したものを準備し使っている。子ども教育フィールドの〈縄文×音楽〉の連携授業では、保育士や教員を目指す学生のため、各自が縄文原体をつくり施文体験を行っている。

⑤ 縄文マスク

2019年2月の小野寺南小での実践では、インフルエンザ対策も兼ねて、学生たちが土器や土偶などの文様を調べながらマスクにマジックで文様を描いて準備した。それを実践当日、児童たちに渡し、児童はそれを着用して実践を行った。その後、コロナ禍となり事前に準備したものを参加者に渡すようなことができなくなり、縄文マスクは製作していない。

3.2 2018年9月小野寺南小学校における実践1（1期：土器破片をもとにした実践） －「縄文文化をもとに音楽をつくろう」－

2018年度で13年目を迎える表現活動交流会に、〈縄文×音楽〉の活動を取り入れ、坪能由紀子氏が提唱しているTASモデル（T：Teacher、A：Advisor、S：Supporter）に位置付けて、「縄文文化をもとに音楽をつくろう」という題材で実践を行った。ここでは、Tは小野寺南小学校6年生担任の黒子美和子教諭が全体の進行をし、Aは中村と早川、Sは短大の学生が各班の音楽づくりをサポートすることになった。この実践の詳細については、黒子他（2020）を参照されたい。当日の実践には音楽教育研究者5名が見学に来られ、貴重なご助言をいただくことができた。

まず9月の実践に向けて、早川の音楽の授業においては、教育実習から戻ってきた学生たちと、6月末ごろから土器片をもとにした音楽づくりの活動を模索していった。さらに、全校児童に縄文に興味をもってもらえるようにするため、全長15mの等尺大型年表、麻製の縄文風衣装（6年生分）、土器片の拡大大型パネル等を準備した。

また、中村から縄文時代に存在していた動物（イノシシ、シカ）を音素材に追加したらどうかと提案があり、さらに竹も真竹のような竹ではなく、もっと細い竹だったとのこと

から、ヨシを追加した。

当日は、子ども教育フィールド学生 24 名が参加し、全校児童 77 名を縦割りにした 8 つの異学年グループ（児童 9 ～ 10 名）に 3 名ずつ学生が Supporter として入り、2 時間（45 分×2）の実践に取り組んだ。この実践では、中根八幡遺跡でも活用した土器片をもとに音楽づくりを行うことにした。全校での取り組みであったため、班ごとにあらかじめ主になる音素材を指定（1 班：イノシシ骨、2 班：貝、3 班：篠竹・ヨシ、4 班：石、5 班：ヒョウタン、6 班：シカ角、7 班：木の実、8 班：豆類）し、土器破片の文様を、これらの音のリズムに置き換えて表現した。学生たちは児童のアイデアを引き出しながら、4 分の 4 拍子で 4 小節の音楽づくりのサポートを担った。

当日は、9 月になっても気温が高く、班ごとの音楽づくりは各教室で行い、発表は体育館に集合して行った。班ごとの音楽づくりの発表のあとに、Teacher 黒子教諭の指揮で、Supporter である学生 4 名が土笛でドローン（低音の持続音）を吹き、そこに班ごとの音楽を順番にのせていき、最後に 1 つの音楽にまとめた。

この小野寺南小での実践は、〈縄文×音楽〉を学校現場で最初に行ったものであり、この実践が土台となり、さらなる展開へとつながっていくことになった（図 5）。

3.3 2019 年 2 月小野寺南小学校における実践（2 期：土器文様構造と音楽の構造を関連付けた実践）－「縄文文化をもとに音楽をつくろう Part 2」－

①事前準備

3.2 で示した小野寺南小学校での実践では土器片をもとに音楽づくりを行った。しかし、音楽教育研究者から、土器片では土器全体がよくわからないとの助言を受けた。

その後、早川は音楽づくりのヒントを得ようと東北地方の縄文遺跡や博物館を視察した。そこで、博物館の壁に掲げられていた土器の展開図を知り、粘土にひもで文様を付ける体験をしたり、ストーンサークルなどを見学したりしながら視野を広げていった。粘土に縄文原体を転がして様々な文様を付ける体験は、考古学が専門ではない早川にとっては、とても興味深いものであったため、ぜひ施文体験も取り入れることを中村に提案し、子ども教育フィールドの学生たちも縄文原体を製作し、施文体験を行うことになった。

音楽づくりの方法として、土器片ではなく、今度は本物の土器と、さらにその土器の展開写真を活用した音楽づくりに移行することにした。それに伴い、小野寺南小学校における 2 回目の実践に向けて、再び学生たちと事前準備を行った（図 6）。

まず、中村が土器の全景を一周した土器写真を撮影し、中村の指導を受けながら、学生



図5-1 事前の検討



図5-2 縄文土器の説明



図5-3 縄文風衣装着用(6年生)



図5-4 班で音楽づくり



図5-5 班で音楽づくり



図5-6 班で音楽づくり

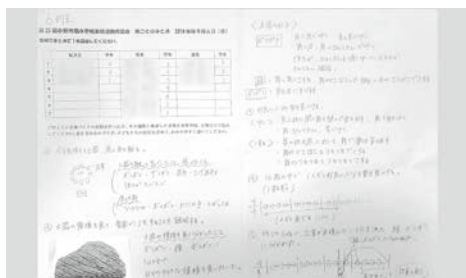


図5-7 学生記録

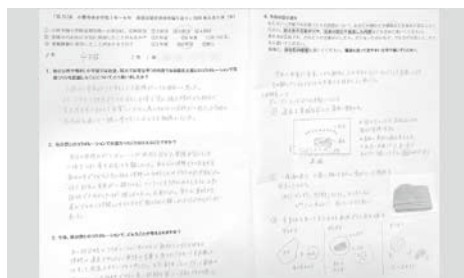


図5-8 学生記録

図5 2018年9月小野寺南小学校での音楽づくり

たちがそれを切り取って重ね合わせて展開写真にした（図4-4）。展開写真を見ると、これまで土器片ではわからなかった土器全体がわかるようになった（図6-4）。そこで、小学校学習指導要領における〔共通事項〕に示されている ア 音楽を特徴付けている要素と イ 音楽の仕組み から、特にリズム、強弱、反復、呼びかけとこたえ などが、土器文様の構造と親和性があるのではないかと考えた。例えば土器文様の渦巻が何度も繰り返されたりするのは、音楽の〔共通事項〕である反復と親和性があるのではないかということである（図7-1）。

展開写真をトレーシングペーパーに写して展開図にし（図6-1・2）、色分けをしながら



図6-1 土器展開写真をトレーシングペーパーに写す



図6-2 土器展開写真をトレーシングペーパーに写す



図6-3 事前の教材研究



図6-4 展開写真で教材研究



図6-5 縄文土器の観察



図6-6 土器をもとにした教材研究

図6 2019年2月小野寺南小学校での実践に向けて教材研究

分析するなど、学生同士で音楽づくりの方法を模索した(図6-3)。また、“DOT”コンボジションの手法を試したり、さらに音素材として低音の充実を図る目的で大きなヒョウタン、さらに音高差や響きの豊かさを求めて石のなかでもサヌカイトを試したりしながら教材研究を行った。施文体験は学生にとっても文様に興味をもつきっかけとなった(図4-6)。

そして、当日児童へのプレゼントとしても渡せるよう、またインフルエンザ対策も兼ねて、縄文の文様の特徴を土器や土偶などを調べながら、マジックやクレヨンでマスクに文様を描

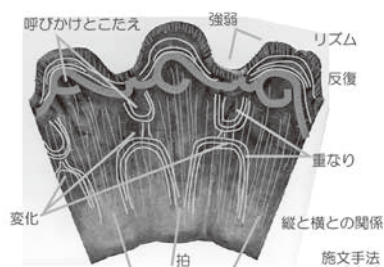


図7-1 土器・音楽構造



図7-2 黒子教諭の説明



図7-3 土器の観察



図7-4 班で音楽づくり



図7-5 音楽づくりの発表



図7-6 振り返り記録

図7 2019年2月小野寺南小学校での実践

いて準備した（図4-7・8）。また日本史フィールドの学生有志も縄文原体を用いた腕輪を準備した。学生自身も縄文への興味関心を高めながら、児童へのサポート体制を整えていった。当日の実践については、中村・早川（2020）を参照されたい。本稿においては一部写真で紹介する（図7）。

②当日の記録とコメント

当日は、学生たちは各班の活動をサポートするとともに、その作品の記録を担当した。研究の一環として、どのような意図で、どの音素材を、どのように演奏したかを把握することが目的であったが、学生自身の振り返りと児童の活動を記録するという学びにつながり、各班でそれぞれ個性的な記録が残された（図7-6）。

また、事後には児童、教員とともにサポート学生にもアンケートを実施した。教員用との共通項目のほか、活動意図をふまえて、考古学分野・音楽分野・考古学+音楽それぞれのメリット・デメリットを挙げてもらった。これらの記録も既に報告済みであるが、考古学分野については、縄文時代の暮らしや土器を知るという点や、考古学への関心、新しい思考というメリットが指摘された。一方、土器の観方を伝えるには十分でないこと、土器本来の用途の印象が薄れるという指摘もあった。音楽づくり分野については、発想力・創造力・新規性としてまとめられるコメントが多く寄せられた。他方、実際の演奏にあたっては、打楽器のみでワンパターンになりやすいこと、音程・強弱・重なりなどの表現が難しいという具体的な課題が多く指摘された。両者を統合したプログラムのメリットについては「1つの音楽をつくるということがゴールだが、土器の文様などもしっかり見ながら進めていく為、両方の事をしっかり考えることができる。」「一度に、縄文時代と音楽の楽しさを感じることができる。グループで活動することによって、発言する場面や、グループ同士でのコミュニケーション能力を高めることができる。」、デメリットについては「考古学と音楽教育の共通点が思い浮かびにくく、その2つを合わせるねらいがわかりにくい。」「学んで欲しい部分がしっかり伝わるとは限らない、伝えることが難しいことが多い。」などのコメントが寄せられた。これらは、筆者らの実感とも重なるものであり、以後の実践でも課題となった事柄でもある。

なお、この実践2期の土器文様構造と音楽の構造を関連付けた実践は、兵庫県尼崎市立下坂部小学校での実践（中村・早川 2022）につなげていくことになるが、遠方ということもあり、中村・早川だけが出張しての実践であるため、学生が直接関与していないので本稿では言及しない。



図8-1 発掘体験



図8-2 土器破片採集



図8-3 ふるい



図8-4 洗浄

図8 子ども教育フィールドの発掘体験

4. 短大生を対象とした〈縄文×音楽〉実践

4.1 体験発掘後に「発掘体験のうた」づくり

楽譜1 発掘体験のうた 作詞・作曲 K.I.

土器の発掘と聞いて

ただ土を掘るんだと思ってた

だけど実際 現場に行って

大昔の土を見て 歴史感じた

土を削って行く中で

「ガリッ」とした音が聞こえた瞬間

小さな期待が芽生えて

褐色の時を見つけられて

掘り出せたときに

喜びが込み上げてきた

日本史フィールドの考古学実習と連携して、2016（平成28）年度から発掘調査に子ども教育フィールドの保育士、教員養成課程の学生も2. で示した子ども未来大学での発掘体験のサポートに関わってきた。しかし、2020（令和2）年4月の緊急事態宣言から様々な行事が中止せざるを得ない状況となった。そのような状況を経て、2021（令和3）年8月に、発掘体験希望者15名が半日程度参加した（図8）。縄文土器の破片を掘りだし、洗浄したりするなど教員を目指す学生にとって貴重な体験ができた。そこで発掘体験後にその時の感動や感想をもとに、

楽譜2 発掘体験のうた～ふるいの大切さ～

作詞・作曲 K.O.

ふってふって ふりまくる
ふってふって ふりまくる
ふるいをつかって
小さなかせきもみのがすな！

ふってふって ふりまくる
ふってふって ふりまくる
小さなかせきもたいせつに！
小さなかせきもたいせつに！

ふってふって 見つけるよ
ふってふって 見つけるよ

楽譜3 発掘体験のうた 作詞・作曲 A.S.

土の中から 顔を出した
内気な土器さん はじめまして
そんな土器は 赤黄黒茶色
色んな色のドレスを着てるの
石と見間違ふこともあるけど
色んな模様のドレスを着てるの

でもそんな土器は
なかなか見つけることは出来ないけど
見つけられたらドキドキ
とても嬉しいね

土の中から顔を出した
素敵な土器さん こんにちは
いつか1つに戻れたらいいね
素敵な姿でまた会おうね
素敵な姿でまた会おうね

簡単な歌づくりに挑戦することになった。
音楽の授業での学びを活かし、いろいろな
発想でつくるように促した。伴奏の有無や
曲の長さも問わず、即興的に口ずさんだも

のでもよいとした。これは将来教員になってから音楽づくりの指導にも活かせるのではないかと考えたからである。創作した歌は学生自身が歌った音源を添付してもらった。作品のなかには①身体表現を伴ったもの ②ウクレレ伴奏で弾き歌い ③音楽アプリを活用した伴奏に歌をつける ④アカベラ（無伴奏で歌のみ）の作品など様々であった。本稿では、その中から3作品を紹介したい。なお、本稿の掲載には承諾を得ている。

楽譜1は、原曲はウクレレの弾き歌いであるが、本稿では旋律のみ楽譜で示している。この曲は1970（昭和45）年代、当時全盛期だったフォークソングの雰囲気を感じられる曲調となっている。構成は、A メロ：土器の発掘～、B メロ：だけど実際現場に行つて～、サビ：土を削つて行く中で～となっている。ふと過去の情景を思い出しながら、口ずさめるような曲である。

楽譜2は、発掘後にふるいを使って小さな土器片を探した経験が心に残っているのであろう。出だしの「ふってふって」の歌詞とリズムが何度も反復され、短いながらもとても印象に残る曲である。1回目に出てくる「小さなかせきも」のフレーズが、調性内のフレー

楽譜 1

発掘体験のうた

作詞・作曲 K.I.

C G Am
mf どの きの はっ く つ と き い て -
 5 F C F G
 た だ つ ち を ほ る ん だ と お も っ て た - だ け
 9 Am Em F Em
p ど じ つ さ い - げ ん ば に い っ て -
 13 Dm D7 Em7 G
 お お む か し の つ ち を み て れ き し か ん じ た
 17 G7 C E
mf つ ち を け ず っ て
 21 Am C CΔ7C7 F C
 ゆ く な か で - ガ リ ッ と し た お と が き
 25 F G7 C E7 E
 こ え た し ゅ ん か ん ち い さ な き た い が
 29 Am F C
 め ば え て - *f* か っ し ょ く の ど き を -
 33 F G F G
 み つ け ら れ て - ほ り だ せ た と き
 37 Am F *rit.* Fm
 に - *mf* よ ろ こ び が - こ み あ げ て - き た
 41 C F G C

楽譜 2

発掘体験のうた
～ふるいの大切さ～

作詞・作曲 K.O.

ふつ て ふつ て ふりまくる ふつ て ふつ て ふりまくる

5
ふるいをつ かっ て ちい さな かせき も み の が す な

8
ふつ て ふつ て ふりまくる ふつ て ふつ て ふりまくる

12
ちい さな かせき も たいせつ に ちい さな かせき も たいせつ に

16
ふつ て ふつ て みつけるよ ふつ て ふつ て みつけるよ

注：歌詞のかせき（化石）は、土器のかげら（欠片）のこと



ふるいを使って微細な資料を回収

楽譜 3

発掘体験のうた

作詞・作曲 A.S.

つ ち の な か か ら か お を だ し た う ち き な ど き さ ん は じ め ま し て

そ ん な ど き は あ か き く ろ ち ゃ い ろ い ろ ん な い ろ の ド レ ス を き て る の

い し と み ま ち が う こ と も あ る け ど い ろ ん な も よ う の ド レ ス を き て る の で

も そ ん ー な ど き は な か ー な か み つ け る ー こ と は で き な い け ど み

つ け ら ー れ た ら ド キ ド キ と て も う れ ー しい ね ー つ

ち の な か か ら か お を だ し た す て き な ど き さ ん こ ん に ち は

い つ か ひ と つ に も ど れ た ら い い ね す て き な す が た で ま た あ お う ね す

て き な す が た で ま た あ お う ね

ズではなく簡易転調しているが、作者はつぶやきうたのように表現している。作者のこの言葉に対しての想いや、その後続く歌詞に対する緊張感が感じられる。後半の同じ歌詞は調性内である事で、その後の歌詞に対する優しさが感じられる。尚、歌詞のなかの「かせき」は土器のかけら（欠片）のことであるであるが、修正せずに掲載している。

楽譜3は、ポピュラー音楽風な曲調でABA'構成の長調で作曲されている。Bの部分は感情を表現した歌詞に表現されるように短調に転調されている。19小節目の「ドキドキ」の歌詞からA'（長調）に向けて次々に転調している。

特に大きな特徴は、土器を見つけた時の表現（Aパート）は跳ねた音楽（三連符）で作られているが、13小節目4拍目～21小節目は、なかなか土器が見つからないという少し不安な感情の表現（Bパート）は跳ねない（Even）で作られており、歌詞、コード進行、リズムで世界観を表現している。

4.2 「教科教育法音楽」等の授業実践

〈縄文×音楽〉の実践は、子ども教育フィールドの学生も対象として、教科横断型の授業を実際に体験を通して学べるよう、2018（平成30）年度から毎年実践してきた（図9）。

早川が担当する音楽の授業では、中村をゲスト講師として、特に2022（令和4）年度からの2024（令和6）年度の「教科教育法音楽」「歌と楽器」等の授業（90分×2）では、年代の異なる2つの土器（縄文土器中期と弥生土器、実施年度によっては縄文中期と縄文晩期）の資料を用いて、ABA形式の音楽づくりを行った。学内での授業実践では、國學院大學栃木学園参考館（博物館相当施設）所蔵の土器を借用して行っている。

2022（令和4）12月の実践では、〈考古学×音楽〉「みて、さわって、つくろう—縄文土器と弥生土器からの音楽づくり—という題材で、子ども教育フィールド1年生「教科教育法音楽」履修者12名、2年生「専門音楽」履修者4名の16名で行った。2年生4名は前年度にも体験をしているが、今回は弥生土器も使うということと、参加者が異なるということに参加してもらった。

学生たちは縄文土器と弥生土器の観察を通して、時代の違いを知り、それをもとにABA形式の音楽をつくるという、全く新しい創造的活動を体験した。4名ずつ4つの班に分かれ、班ごとに音楽づくりを行った。縄文土器と弥生土器の「比較」、さらに他班の作品との「比較」によって、「歴史的な見方・考え方」や相互理解の力を養うことをめざした。授業の展開は、1. で示した流れで取り組んだ。当日の音楽づくりの活動動画は、今後、中村のリサーチマップに公開予定であるため、本稿では詳細は省略する。

授業後の学生が書いた振り返り記録から、抜粋して紹介したい。(太字は筆者)

- ・他の教科とこのように**2つ同時に学べてしまう授業**はとても面白い。**歴史と関連づけて、土器をイメージして音楽をつくったり、グループで活動**をすることで、**協調性や、表現力、歴史の知識**などが身につくと思った。
- ・社会の授業では、深く触れられないような**土器の模様や形に、音楽と連携を行うこと**で**気づくことができる**とても良い機会。他の分野でも行えることであり、今後、私たちが現場に出た時に、どう**連携**していけばよいか、**イメージを持つ**ことができた。
- ・1つの教科だけでは学ぶことのできない**深い部分まで学ぶ**ことができて、また、**子どもの興味**を引くような授業にできると思った。
- ・**土器**について学べたり、**長い時代**を再確認することができて**楽しかった**。今回の授業には、土器を実際に**触れて**みたり、**見て**みたりすることで、普段の音楽ではできない、**形を表現**してみたり、**時代のことも考えながら演奏**を考えてみたりなど、普段よりも**頭を使って、表現を精一杯やろうと協力**できて、とても**楽しかった**。
- ・1回で2つの分野の知識やつくる際の技能などを考え実践する中で、より深い学びにつながり、今までとはまた異なる（社会から音楽を、音楽を社会から考えられる）角度から物事をみることができた。比べることをすると、区別がつけやすく、どのような感じにするかというのが、掴みやすかった。色々なところで試せると**おもしろい**思った。
- ・個人のイメージと班との話し合いを通して様々な要素を取り入れてつくることができ、**2つの時代の違いをどう表現すれば比べる**ことができるのかなと深くまで考えられた授業となった。
- ・土器に対しての**イメージを共有**することで、**新しい気づき**があった。イメージの違いが音の出し方や表現の仕方に違いが生まれて、**ひとつの音楽に**することができた。

以上、7名のコメントを紹介したが、これらの記述からも〈縄文×音楽〉の授業は、土器を通して、自ら思考し、深く学び、班の仲間との協働により、見方・考え方を広げ、新たな価値を創造しているのではないかと考察する。

4.3 「教科教育法音楽」等の授業後に土器の歌づくり

ここでは、〈縄文×音楽〉の授業を受講した後につくった曲を2曲紹介する。

2023（令和5）年、2024（令和6）年の〈縄文×音楽〉の授業後に、つくった作品をPowerPointに歌詞と音源を添付してGoogle Classroomに提出してもらった。授業で使った土器写真を使ってスライドを作成しても良いこととした。本稿では2023（令和4）年度の授業後に

提出された2名の学生作品を紹介したい。2作品は縄文時代の生活に関わるイラストなどをインターネットで探して取り入れるなど、歌詞のイメージがさらに広がるように作成していた。さらに2作品ともピアノ伴奏を付けて提出している。本稿では、その音源を採譜し旋律のみの楽譜を以下に示す。

楽譜4は、縄文土器の用途や生活を想像しながら歌詞に詠っている。1番、2番、3番は、同じ旋律の繰り返しである。2番と3番の間には曲想が違う旋律を挿入している。曲はAABAの構成でできているが、Aは軽快なリズムと楽しさが伝わってくる。Bになると、曲想が異なり、歌詞やフレーズからも縄文土器への優しさや思いやりを感じることができる。最後にAに戻り、再び軽快になり、タイトルの「発明家」が最後に出てくるところが特徴的である。縄文土器に対する想いが伝わってくる曲となっている。

楽譜5は、授業の中で学んだ土器の用途や、初めて本物の土器に触ってみる緊張感が表現されている。さらに音楽づくりの活動で使った縄文土器と弥生土器の特徴の違いも歌詞に詠われている。曲は反復のリズムを使い、軽快で、とても歌いやすい曲である。出だしのどきどきは土器を表し、次の「ドッキドッキ」は心情を表現しているが、旋律が見事に合致している。

楽譜4 縄文時代の発明家♪ 作詞・作曲 E.A.

1. 縄文時代

お鍋も作ってみるよ♪
まぜまぜ こねこね 形を整え
縄で 模様も つけちゃうよ～♪

2. 縄文時代

お手製 お鍋は 縄文土器♪
肉や～ 野菜～ コトコト煮込んで
煮物の～ できあがり～♪

縄に貝がら 鹿の角 トチの実
どんぐり いろいろ (いろいろ)
いろんなものに囲まれて♪
狩りの技術も 食糧も
何でも みんなで 分け合って
縄文土器をみんなで囲み～
楽しい時間を過ごしてた～♪

3. 縄文時代

あるもの 全部 道具だよ♪
知恵を 湧かせて 創造するよ
今なら 确实 発明家～♪

4.4 〈縄文×音楽〉大学祭での発表

小野寺南小学校での表現活動交流会における全校児童との音楽づくり、さらに教科教育法音楽等での学びをもとに、2018（平成30）年、2019（令和元）年の大学祭における野外公演でも、実践の一端を発表することになった。例年の野外公演では、早川の授業で学

楽譜 4

縄文時代の発明家

作詞・作曲 E.A.

じょうもんじだい おなべも つくってみるよ

5 まぜまぜこねこね かたちをととのえ なわでもようも つけちゃうよ

9 じょうもんじだい おてせい おなべは じょうもんどき

13 にくや やさい コトコトにこんで にーものの できあがり

17 なわに かいがら しかのつの トチのみどんぐり いろいろ(いろいろ)

21 いろんなものにかこまれて かりのぎじゅつもしょくりょうも

25 なんでもみんなで わけあって じょうもんどきを みんなでかこみ

29 たのしい ときを すごして た

33 じょうもんじだい あるもの ゼーんぶ どうぐだよ

37 ちえをわかせて そうぞうするよ いまならかくじつ はつめいか

楽譜 5

土器のうた

作詞・作曲 H.A.

1. $\text{♪} = \text{♪}^3$

1. $\text{♪} = \text{♪}^3$

ど き ど き ドッ キド キ そつ とさわつ て みてみよう

5 そつ とのぞいて みてみよう いせきのなかから みつけたよ

9 おお むかし の は つめ い ひ ん

13 2. $\text{♪} = \text{♪}^3$

13 2. $\text{♪} = \text{♪}^3$

ど き ど き ドッ キド キ もよう がたくさん じょうもんど き

17 かたち がまるい やよいど き に たりやいたり いれもの だつ た

21 おお むかし の ひ つじゅ ひ ん



使用した縄文土器（左：栃木市平川遺跡）と弥生土器（右：出土地不明）

國學院大學栃木学園参考館所蔵

楽譜 5 「土器のうた」 作詞・作曲 H.A.

1. どきどき ドッキドキ
そっと触ってみてみよう
そっとのぞいてみてみよう
遺跡の中から見つけたよ
大昔の発明品

2. どきどき ドッキドキ
模様がたくさん縄文土器
形が丸い弥生土器
煮たり焼いたり入れ物だった
大昔の必需品

んだ内容（身体や声をつかった創作、竹を使ったバンブーダンスの創作など）を発表していたが、この年度は一般来場者の前で土器による音楽づくりも披露した。学生が製作した縄文風衣装をまとい、大型年表を広げ、さらに土器写真を貼り付けた大型パネルを示しながら自然素材で音楽を奏でた（図 10）。

また、コロナ禍を経て3年ぶりに開催された2022年10月の大学祭では、実行委員会企画の「國コレ」（KOKUTOCH COLLECTION 2022）に、縄文風の衣装を追加製作した2年生が1年生を誘い9名で参加し、自ら製作した縄文風衣装を着て

踊った。縄文から現在へと時を経て新しい感覚で表現し、入賞を果たした（図 10 - 4）。



図9-1 縄文を学ぶ

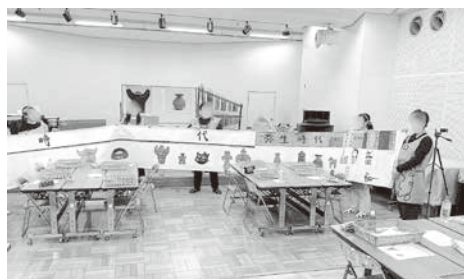


図9-2 大型等尺年表



図9-3 縄文原体製作



図9-4 文様施文体験



図9-5 縄文土器の観察



図9-6 弥生土器の観察

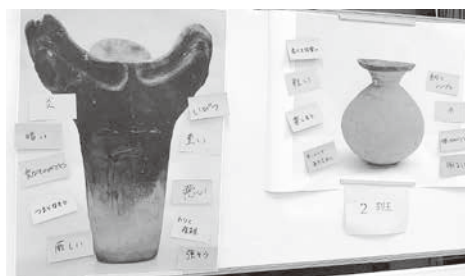


図9-7 付箋紙にコメント記入



図9-8 音素材選び



図9-9 音楽づくりの練習



図9-10 音楽づくりの練習



図9-11 音楽づくりの発表



図9-12 記念写真

図9 授業の流れ



図 10-1 大型年表



図 10-2 欠片で音楽づくり



図 10-3 展開写真で音楽づくり



図 10-4 記念写真

図 10 大学祭での縄文

4.5 中根八幡遺跡における「縄文まつり」での活動

中根八幡遺跡は、日本史フィールドが考古学フィールドワークの授業として、2015（平成 27）年度から発掘調査を実施し、2023（令和 5）年度に 9 年間の調査が終了した。早川が所属する子ども教育フィールドでも、2 で述べたように小学生を対象としたサポートや発掘体験等で連携した活動を行ってきた。

本遺跡については、調査開始当初から地域連携を意識した活動を行っており、栃木県大学地域連携活動支援事業の助成を得ている。中村の後任である大工原豊准教授は、調査終了の 2023（令和 5）年度から、レガシーとしてその地で「縄文まつり」を開催している。そこで、2023（令和 5）年に 4 名、2024（令和 6）年に 3 名の子ども教育フィールド有志も参加した（図 11）。

縄文まつりでは、遺跡の説明や縄文土器のレプリカによる縄文鍋が来場者にふるまわれ、土器で煮た美味しい鍋を楽しんだ。

子ども教育フィールドの学生有志は、〈縄文×音楽〉で使用している縄文風衣装と、日本史フィールドの学生が縄文まつり用にデザインを考案し製作した衣装を展示して、来場者に着用してもらうことになった。さらに、中村と早川が〈縄文×音楽〉プロジェクトで使用している縄文時代の音素材を並べ、参加者と一緒に音遊びを楽しむコーナーを設営した。



図 11 - 1 縄文鍋



図 11 - 2 会場



図 11 - 3 自然素材



図 11 - 4 自然素材に触れる体験



図 11 - 5 音楽づくり体験



図 11 - 6 縄文風衣装体験



図 11 - 7 縄文土器のうた



図 11 - 8 自然素材をもって一緒に歌う

図 11 中根八幡遺跡での縄文まつり

さらに、第2回目となる2024（令和6）年の縄文まつりでは、大工原准教授から雰囲気盛り上げるために、音楽に合わせて踊るなどのパフォーマンスを依頼された。遺跡で流す曲を検討したが、子ども教育フィールドの学生が創作した曲はどうかと考えた。そこで、2022（令和4）年の発掘体験に参加した学生が創作した歌のなかから大西結子さんが創作した曲を選択することにした。大西さんの原曲は1番だけの歌詞であったので、本人の承諾を得て、2番に中根八幡遺跡という名称を追加し、早川が補作することにした。**楽譜6**は、冒頭の「どどど」という歌詞とフレーズに特徴がある曲である。「どどど」と言葉遊びが続き、一番大切な言葉「土器」がキメになっている。最後の「土器」は、冒頭の「土器」よりも高い音程になっており、高揚感が感じられる。当日会場となった遺跡には、何度もこの歌がスピーカーから繰り返されて流され、子ども教育フィールドの学生がこの曲に合わせて振り付けをして踊った。来場者からも、この歌が耳に焼き付いてしまったとのコメントをいただくことができた。この中根八幡遺跡での発掘体験ができた時の心情を詠った学生が創作した歌が、この遺跡でのまつりに還元できたことは、とても感慨深いものがある。この縄文まつりの様子は、とちぎケーブルテレビでも放映された。

参加した子ども教育フィールドの学生は、「様々な年齢層の方が沢山参加されていて、たくさんの方とお話することが出来たのが、とても貴重な体験でした。そして楽しかったです。また、音楽づくりでは自分では浮かばないようなことも考えられている人もいて、とても勉強になりました。小さい子は音楽に乗って、木の実などをひょうたんに入れることを楽しんでいましたし、音楽はつくるだけでなく、様々な楽しみ方があることを改めて感じました」とコメントしている。世代を超えた来場者の方と自然素材を介してコミュニケーションがとれたのではないかとと思われる。

5. 音楽づくりを越えた縄文を起点とした創造的活動

教育の現場ではSociety5.0社会の到来に向けて、協働的・創造的な人材養成が求められている。2016（平成28）年度から〈縄文×音楽〉のプロジェクトを開始し、保育士、幼稚園、小学校の教員養成課程である子ども教育フィールドの学生たちは、これまで様々な体験をしてきた。これまで学生たちが関わってきた活動について振り返ると、新たな実践のたびに、学生たちに協力してもらったり、実践方法を試行したりしてきた。学生たちは、考古学と音楽との横断的な実践を通して、土器の観察や音楽づくりにおいて、見方や表現にバリエーションが広がっているのではないかと考察できた。

本稿で紹介した〈縄文×音楽〉プロジェクトに関わる活動の多くは、児童を対象とした実践のサポートや、授業内での実践であったが、そこでは衣装の製作・補修、音素材の整理、年表等の作成・補修など、プロジェクトの中核である音楽づくり以外の様々な活動も当初から行って

楽譜 6

中根八幡遺跡のうた

作詞・作曲 大西結子(1番)
補作 早川富美子(2番)

Cajón (カホン)



楽譜6 中根八幡遺跡のうた

作詞・作曲 大西結子（1番）
補作 早川富美子（2番）

どどど どどど 土器

どどど どどど 土器

発掘すると たくさんあります

いろんな種類

わくわくドキドキ

とまらない

見つけよ 見つけよ 見つけよ

いろんな土器

どどど どどど 土器

どどど どどど 土器

発掘すると たくさんあります

中根八幡遺跡

わくわくドキドキ

とまらない

見つけた 見つけた 見つけた

縄文土器

いた。さらに、本稿では、学園祭でパフォーマンスや、歌詞を伴ううたづくりという新たな活動も報告した。音楽が特に専門ではない学生たちではあるが、土器から、それぞれが感じたことを、ことばで表現する過程で、縄文時代の生活や暮らしを想像し、さらに視野を広げ、音楽を創造していることが考察できた。

これまで筆者らが行ってきた実践は、音素材をもとに音楽づくりを行うことであったが、うたをつくるという活動も、〈縄文×音楽〉の幅を広げ、新たな価値を創造するプログラムとなるのではないかと考えている。

〈縄文×音楽〉プロジェクトでは、2024（令和6）年1月の新潟市立早通南小学校における実践において、社会科・音楽科以外に、体育科、家庭科および課外の音素材体験（「縄文ワールド」）と一体化した教科等横断型授業を行い、縄文を起点とした音楽以外の創造的活動へと新たな展開をとげた（中村・早川・渡辺 2025 予定）。考古学・歴史系博

物館・文化財に関わる分野の立場としては、「歴史好き」以外の多くの方々に、地域の文化財に親しんでもらうかが大きな課題となっている。また、前述のように教育学の立場では、正解のない課題に対して協働して解決策を見出す創造性の養成が課題となっている。こうした中で、筆者らは、音楽以外を含めた創造的活動の基点としての活用を模索しはじめたところである。

しかし、振り返ってみると、子ども教育フィールドの学生たちは早くから多角的な展開を実践してきたのである。2024（令和6）年度の学内授業「児童文化」では絵本の読み聞かせの課題で縄文土偶をテーマとした絵本を選択した学生も現れた。〈縄文×音楽〉は、知る（探求）、つくる（創造）、新たな価値を見出し、物事を多角的に捉え、思考することができる可能性があると思われる。

今後、博物館や教育の現場においても他分野・他教科との連携や展開の可能性を探っていきたい。

表1 2016年度～2024年度の〈縄文×音楽〉の実践

表1-1 実践1期

実践1期 土器文様の違いやリズムを音で表現する実践 ・社会科と音楽科のクロスカリキュラム（相乗効果による学びの深まり） コンセプト ・実物の土器と考古学的説明を手掛かりとした創作活動 ・縄文の自然素材（木の実、豆、貝、骨、石、木、葦など）を使用 ・國學院大學短期大学の考古学と教員養成課程とのコラボレーション					
第1期	回	年月	活動場所、活動名	対象	◆短大生のサポート □学芸員 ★研究者等
	1	2016年8月	栃木県中根八幡遺跡 栃木県主催：子どもの未来創造大学の講座「縄文遺跡を発掘しよう!」	栃木県内小学生3年～6年生20名	◆短大生10名 *日本史フィールドが運営
	2	2017年8月	栃木県中根八幡遺跡 栃木県主催：子どもの未来創造大学の講座「縄文遺跡を発掘しよう!」	栃木県内小学生3年～6年生19名	◆短大生10名 *日本史フィールドが運営
	3	2018年9月	栃木県栃木市立小野寺南小学校第25回表現活動交流会	小学校1年生～6年生全校児童77名	◆短大生23名 *日本史フィールド学生2名も参加 □短大学芸員 ★音楽教育研究者

表1-2 実践2期

実践2期 土器文様構造と音楽の構造を関連づけた実践 コンセプト ・地元の土器（完形・略完形）とその展開写真を用いる ・土器の文様構造を音楽の構造との親和性 「音楽を特徴づけている要素」：リズム、強弱、音の重なり 「音楽の仕組み」：反復、呼びかけとこたえなどに置き換えてみる					
第2期	4	2019年2月	栃木県栃木市立小野寺南小学校第26回表現活動交流会	小学校1年生～6年生全校児童77名	◆短大生31名 □短大学芸員
	5	2020年12月	兵庫県尼崎市立下坂部小学校6年生音楽科授業	小学校6年生2クラス59名	□尼崎市立歴史博物館学芸員 ★音楽教育研究者
	6	2021年8月	埼玉県春日部市郷土資料館「夏休み講座」	小学生親子3組＋学芸員実習生10名	□春日部市郷土資料館学芸員 ★音楽教育研究者

表 1-3 実践3期

実践3期 土器に触れたイメージを重視し、「新しい価値の創造」を目指した「協働的な学び」としての実践 コンセプトの大幅な変更 ・音楽科以外の実践 中学校（特別活動）、中学校（総合的な学習の時間） ・学校以外の実践 郷土資料館、文化財展示館など（小学生対象）、社会教育施設（公民館など）（親子）、（2校の部活動所属高校生）、公開講座（小学生親子）、縄文遺跡、縄文まつり（一般）					
第3期	7	2021年11月	埼玉県蓮田市立平野中学校 進路講演会	中学校全校生徒 89 名	☐ 蓮田市教育委員会学芸員 ☐ 短大学芸員 ★ 蓮田市公民館職員
	8	2021年11月	栃木県栃木市星野遺跡+寺尾公民館「夏休み講座」	小学生親子 13 名	◆ 短大生 2 名 ★ 栃木市公民館職員 ★ 蔵のまち楽習館職員
	9	2022年 1 月	國學院大學栃木中学校 総合的な時間	中学校3年生2クラスの予定だったが、コロナ禍による学級閉鎖で1クラス 19 名	☐ 短大学芸員
	10	2022年 8 月	埼玉県春日部市郷土資料館「夏休み講座」	小学生親子 9 名 + 学芸員実習生 5 名	☐ 春日部市郷土資料館学芸員 ★ 音楽教育研究者
	11	2022年 8 月	とちぎ蔵の街楽習館 栃木高校史学部と栃木翔南高校ダンス部を招請	高校1～2年生 21 名	☐ 横浜市歴史博物館学芸員 ★ 文化庁博物館調査官 ★ 音楽教育研究者 ★ 蔵のまち楽習館職員
	12	2022年11月	埼玉県蓮田市史跡黒浜貝塚×蓮田市中央公民館	小学生親子 14 名	☐ 蓮田市教育委員会学芸員 ★ 音楽教育研究者 ★ 中央公民館職員
	13	2023年 7 月	國學院大學栃木短期大学夏休み応援講座	小学生親子 19 名	◆ 短大生 4 名 ☐ 短大学芸員
	14	2023年 8 月	埼玉県春日部市郷土資料館「夏休み講座」	小学生親子 11 名 + 学芸員実習生 5 名	◆ 短大生 2 名 ☐ 春日部市郷土資料館学芸員 ★ 音楽教育研究者

第3期	15	2023年8月	栃木県中根八幡遺跡 第1回「縄文まつり」	一般来場者（幼稚園 児～小中高生含む）	◆短大生4名 *縄文まつりは日本史 フィールドが運営
	16	2024年1月 ～2月	新潟県新潟市立早通 南小学校6年生	小学6年生3クラス 95名	☐ 新潟市文化財セン ター学芸員 ☐ 信濃川火焰街道連 携協議会学芸員 ☐ 津南町教育委員会 学芸員 ★音楽教育研究者
	17	2024年7月	國學院大學栃木短期 大学夏休み応援講座	小学生親子18名	◆短大生2名 ☐ 本学学芸員 ★音楽教育研究者 ☐ 井戸尻考古館館長 ☐ 春日部市郷土資料館 館長・学芸員 ★「おかしあそび考古 学者」が見学
	18	2024年8月	埼玉県春日部市郷土 資料館「夏休み講座」	小学生親子14名+学 芸員実習生3名	☐ 春日部市郷土資料 館学芸員 ☐ 音楽教育研究者 *国立歴史民俗博物 館助教、佐倉市立 美術館館長見学
	19	2024年8月	栃木県中根八幡遺跡 第2回「縄文まつり」	一般来場者（幼稚園 児～小中高生含む）	◆短大生3名 *縄文まつりは日本史 フィールドが運営
	20	2025年1月	栃木県栃木市立小野 寺小学校 表現活動交流会	小学校全校児童93名	◆短大生18名 *考古学担当教員も 参加

注：上記以外に、國學院大學栃木短期大学人間教育学科子ども教育フィールドの早川担当の音楽授業「教科教育法音楽」「歌と楽器」等では、2018（平成30）年度から学生を対象として〈縄文×音楽〉の体験授業を実施している。また、2019（令和元）年度には中村が担当する博物館実習Ⅲにおいて、早川をゲスト講師として〈縄文×音楽〉の体験授業を実施した。

付記

本研究は科研費 20K20851（研究代表：中村耕作）によるものである。これまでの実践動画・報告は以下で公開している。<https://researchmap.jp/kousaku-n/jomon-music>

本稿は第54回日本音楽教育学会ポスター発表をもとに成稿したものである。本稿における写真、楽譜の掲載は対象者から承諾を得ている。実践においては、國學院大學栃木短期大学の大工原豊准教授（考古学）、日本史研究室の岸美知子助手、國學院大學栃木学園参考館高垣美葉子学芸員の皆さまには、実践のたびに土器の運搬や土器写真の印刷等でご尽力をいただきました。また被服学研究室の高島清江助手には、縄文風衣装の製作等に、何度もお尽力をいただきました。最後に学生の「縄文土器のうた」などの採譜・浄書には、津崎知之氏にご助言、ご尽力をいただきました。心より感謝申し上げます。

これまでの実践報告・口頭発表・ポスター発表

- 中根八幡遺跡学術発掘調査団 2017「栃木県栃木市中根八幡遺跡第2次発掘調査概要報告」『文化財学報』第35集（早川富美子「縄文土器の破片をもとにした「音楽づくり」」）※第1報
- 早川富美子・中村耕作 2019a「発掘した縄文土器をもとにした音楽活動の試み－クロスカリキュラムの視点から－」『國學院大學栃木短期大學紀要』第53号 ※第2報
- 中村耕作・早川富美子 2019b「考古学と音楽教育の連携－中根八幡遺跡の縄文土器と音楽づくり－」考古学研究会第65回総会・研究集会
- 早川富美子・中村耕作 2019c「考古学と音楽教育の連携－縄文文化をもとにした音楽づくりの試み－」日本音楽教育学会第50回大会
- 黒子美和子・早川富美子・中村耕作・小野沢美明子 2020「縄文文化をもとに音楽をつくろう」『音楽の授業づくりジャーナル』第3号 ※第3報
- 中村耕作・早川富美子 2021「縄文土器文様をもとにした音楽づくりの試み（第4報）－小学校全学年「表現活動交流会」の実践から－」『國學院大學栃木短期大學紀要』第55号
- 中村耕作・早川富美子 2022a「縄文土器文様をもとにした音楽づくりの試み（第5報）－小学校6年生音楽科授業における実践と課題－」『國學院大學栃木短期大學紀要』第56号
- 中村耕作・早川富美子 2022b「考古学と音楽教育の連携3－主体的・協働的な学びにむけて－」2022年度考古学研究会ポスター発表（オンライン）
- 中村耕作・早川富美子 2022c「博物館資料をもとにした創作の可能性－〈縄文土器×音楽〉を通じた「協働的な学び」に向けて－」全日本博物館学会第48回研究大会
- 中村耕作 2022d「縄文土器を手掛かりとした音楽づくり」第2回CMM研究会
- 中村耕作・早川富美子 2022e「博物館資料（縄文土器）を用いた音楽づくりの試み－考古学と音楽教育の連携2－」第53回日本音楽教育学会
- 中村耕作・早川富美子 2023a「縄文土器文様をもとにした音楽づくりの試み（第6報）－中学校3年生総合的な学習の時間における実践と課題－」『國學院大學栃木短期大學紀要』第57号
- 中村耕作・早川富美子・實松幸男・鬼塚知典・鈴木廣志・永田陽一・横山りつ子・小林美穂・永岡和香子・近藤真子・石井ゆきこ 2023b「新しい価値の創出を目指した縄文土器を用いた協働的な音楽づくりの試み」日本考古学協会第89回総会研究発表（ポスターセッション）2023年5月28日
- 早川富美子・中村耕作 2023c「考古学と音楽教育の連携3 縄文土器をもとにした音楽づくりを中心

とした教科等横断型授業の試み」日本音楽教育学会第54回大会（弘前大会）（ポスター発表）

中村耕作・早川富美子・渡辺ゆみ子 2024a 「考古学と音楽教育の連携3 縄文土器をもとにした音楽づくりを中心とした教科等横断型授業の試み」考古学研究会第70回総会・研究集会ポスターセッション

※本来は4だが誤って3とした

中村耕作 2024b 「縄文土器から音楽をつくる」第5回 Online Art & Archaeology Forum

早川富美子・中村耕作・渡辺ゆみ子 2024c 「考古学と音楽教育の連携4—社会科・音楽科・家庭科・体育科との教科横断型授業実践の試み—」日本音楽教育学会第55回大会（玉川大学）

中村耕作・早川富美子・渡辺ゆみ子 2025 予定 「津南町の縄文土器をもとにした子どもたちの音楽づくり」『津南学』第13号